

## 日本における URA のキャリアパス可視化の試み --複線径路・等至性モデルによる分析--

○鈴木 紀子 (帝塚山大学経済経営学部)

### 1. はじめに

日本の研究機関に、“研究者の研究活動の活性化や研究開発マネジメントの強化等を支える業務に従事する人材”<sup>1)</sup>として、リサーチ・アドミニストレーター (University Research Administrator: URA) という職種が平成 22 年前後から導入されはじめた<sup>2)</sup>。これまで URA のキャリアについては、着任前の職種に焦点を当てた大規模な調査が中心であった<sup>3)</sup>。しかし、有期雇用が 7 割以上を占める日本の URA<sup>4)</sup>のキャリアパスの実態を把握するには、離職や転職の過程にも着目する必要がある。そこで本稿では、URA 経験者 1 名にライフストーリー・インタビューを実施し、複線径路・等至性モデル<sup>5)</sup>を用いてキャリアの可視化を試みる。これにより、URA 職の持続可能性に影響する要因を探る。

### 2. 調査概要

調査協力者は、国内の複数の研究機関で URA 職を経験し、同職から離職した経歴を持つ A さんである。本調査は 2022 年 12 月～2024 年 3 月までの期間に 3 回実施され、インタビューの平均所要時間は 88 分であった。調査に際しては、事前に研究の目的および個人情報・データについて説明を行い、データ使用に関する同意を得た上でインタビューを実施し、その過程の録音を行なった。

### 3. 結果および考察

図 1 に A さんへのインタビューに基づいて作成した TEM (Trajectory Equifinality Modeling) 図を示す。等至点 (Equifinality Point: EFP) を「研究組織から独立した URA として起業・研究支援を主とする働き方に落ち着く」、両極化した分岐点 (Polarized-Equifinality Point: P-EFP) を「他の研究組織で URA を続ける」とした。分岐点 (Bifurcation Point: BFP) はキャリアの選択枝が生じた点、必須通過点 (Obligatory Passage Point: OPP) を URA 職として共通して経験する点とした。キャリアの継続を阻害する要因となる社会的方向づけ (Social Direction: SD) および促進する要因である社会的助成 (Social Guidance: SG) の両方において、雇用時限や政策等の外的要因が多く確認された。政策により URA を含む研究マネジメント人材の需要が高まっている。他方、URA 経験者のキャリアパスを可視化した結果、有期雇用のため短期間でキャリアの選択や転居を余儀なくされる事例が明らかになった。

### 4. まとめ

URA のキャリアパスに関する研究は、有期雇用の割合の多い他職種、例えば日本語教育従事者のライフキャリア形成<sup>6)</sup>と同様に、転職や離職の過程に着目した研究はそれほど多くはない。今後は引き続き A さんの協力を得ながら、社会的方向づけや社会的助成といった要因の整理を通して TEM 図の精緻化を図り、URA という職種の持続可能性に影響を与える要因の解明を進めていきたい。

#### 【謝辞】

本研究は、JSPS 科研費 21K20276 の助成を受けたものです。本調査については、筆者の所属先である帝塚山大学の研究倫理委員会の承認を得ています。本事例研究の調査協力者の方に深く感謝いたします。

#### 【参考文献】

- 1) 文科省：「リサーチ・アドミニストレーターを育成・確保するシステムの整備」公募要領, 2011.(2024/11/6 取得)  
[https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/science/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2013/03/27/1332584\\_1\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/science/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2013/03/27/1332584_1_1.pdf)
- 2) 澤田：「研究支援の社会史」, 産学連携学, Vol. 12, No. 2, 2016.
- 3) 高橋他, 「日本のアカデミアにおける研究推進・活用人材-競合から協働へと向かう産学官連携コーディネーターと URA-」, 政策研究大学院大学, GRIPS Discussion Papers, 2018.
- 4) 鈴木, 神谷：「URA の配置数に地域差はあるのか」産学連携学会第 22 回大会, 0713C1000-1, 2024.
- 5) 安田, サトウ：「TEM でわかる人生の径路—質的研究の新展開--」誠信書房, 2012.
- 6) 松尾：「転職経験を通じた日本語教育観の変容」, 言語文化教育研究, Vol. 21, 2023.

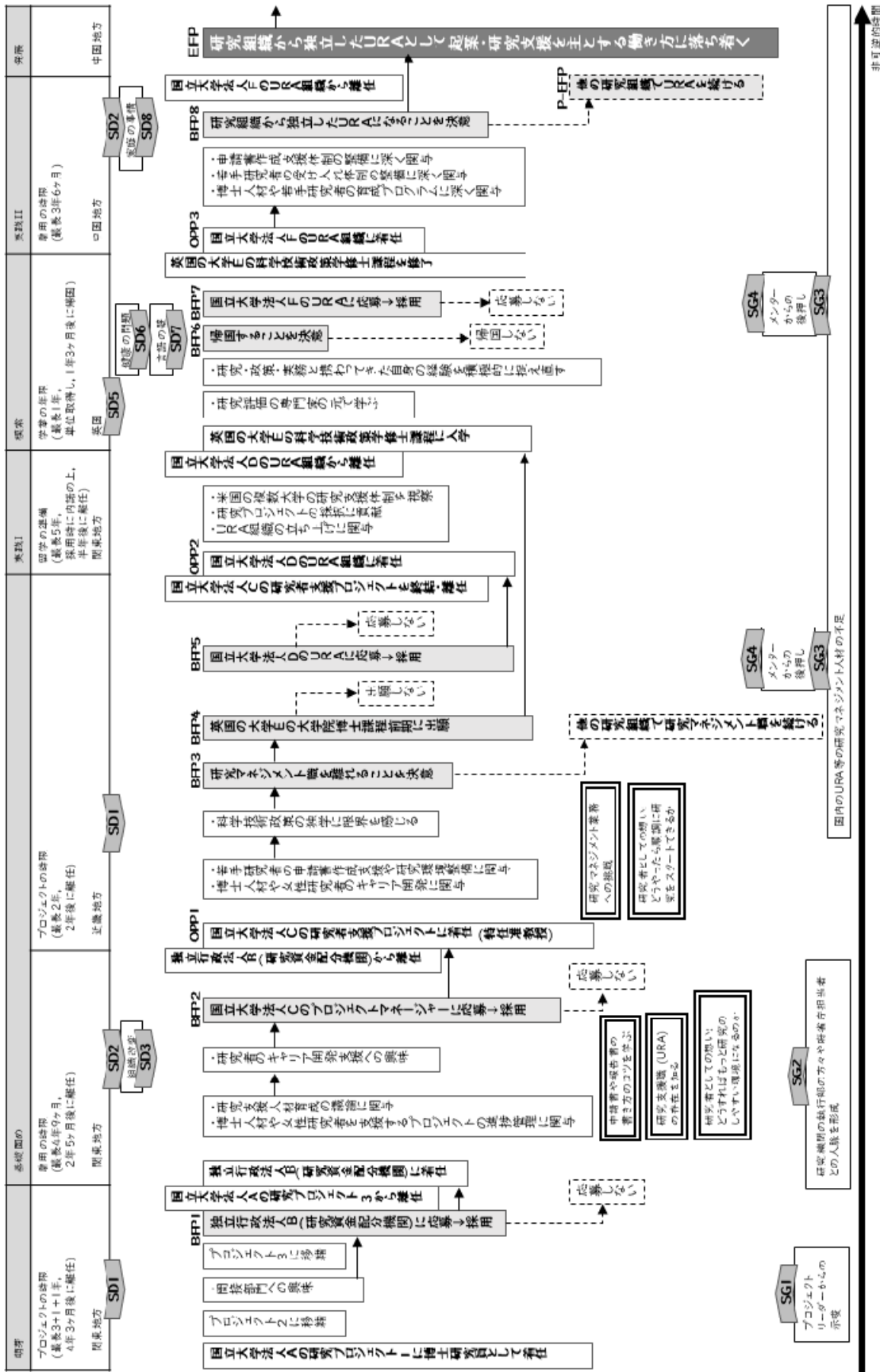


図1: URA 経験者 A さんのライフキャリアに関する TEM 図